

話すこと 指導のポイント

(その5)

～ 対話活動の充実について① ～

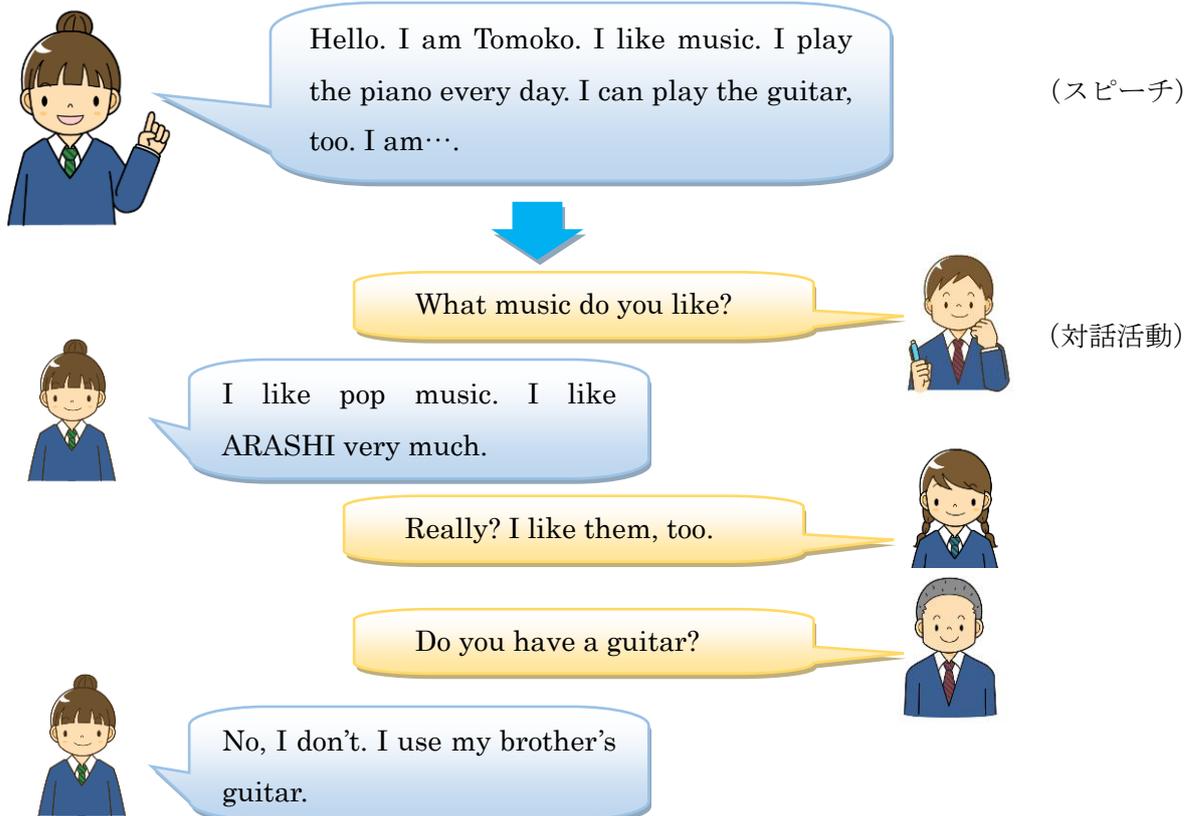
T中学校の実践例

スピーチ発表後の対話活動を充実させる実践例

T中学校では、話す力、特に対話する力を育成するために以下のように工夫しています。

- スピーチ活動の際、スピーチ発表後に、そのスピーチの内容について、聞き手と発表者で対話をする活動を位置付けています。以下が活動の例です。

【スピーチ発表後の発表者との対話活動 (Q&A)】



T中学校で、スピーチ発表後に対話活動を位置付けることで、次の3つの効果が期待できます。

- 1 (話し手に対し)聞き手をより意識させることができる。
- 2 (聞き手に対し)積極的にスピーチ内容を聞かせることができる。
- 3 話す言語活動の充実を図ることができる。(「聞いたり読んだりしたことなどについて、問答したり意見を述べ合ったりすること」)

「話すこと」ーウ 【学習指導要領解説 外国語編 内容より】



特に、3つめの「聞いたり読んだりしたことなどについて、問答したり意見を述べ合ったりすること」の言語活動については、充実させてほしいと思います。「聞くこと」と「話すこと」が関わっているため、思考・判断が伴い、実践的な言語活動になります。

理屈では十分わかっているのですが、難しいですね。何度か試してみましたけど、うまくいきませんでした・・・。



T中学校では、以下のような工夫をしています。

1 質問をしやすい環境を作っている。

疑問詞等を常に黒板等に貼っておき日常的に意識させています。

導入時にも、単元によっては、帯活動等を活用し、生徒が質問する活動を重視するなど工夫しています。

2 段階的に指導している。

1年時前半は、スピーチ発表後に質問を作成する時間を設けています。個、ペア、グループと形態も工夫して、質問文を考えさせます。継続することで、本実践例のように、即興での対話活動が徐々にできるようになっています。

3 小中連携で系統的な指導を意識している。

T中学校区の小学校でも、外国語活動で、スピーチ発表後に、他の児童から質問やコメントをする活動を位置付けています。質問やコメントが、文章でなく語句等であったりしますが、積極的に意見・質問を述べることを重視して取り組んでいます。

T中学校区では、小中連携での授業参観時に小中教員で話し合いを行っています。その際に、小中連携した言語活動ということで共通実践を始めました。

T中学校の実践例を参考に、各校でも工夫して取り組んでください。